

漁業労働における諸問題への改善案の提案

時間的・空間的側面からのアプローチを用いて

久保智英* , 茂木伸之** , 南雲大典*** , 竹内由利子**** , 江口健介**** , 久後雅明**** ,
小川順也**** , 太田 亮*****

要約：われわれは漁業労働の問題点として、睡眠の不規則性と休日の不規則性に焦点を当てて、その改善案を検討した。前者の問題に対する改善案としてはアソカ-スリ-プのように疲労の回復過程からの改善案の検討を提案した。後者の問題に対する改善案としては労働者の数を増やすことで休日ひいては定休日の増加を提案した。また、とりわけわれわれが強調したかったことは、労働者を生活者としてとらえた改善案を検討していくことの必要性であった。

A. はじめに

2001年8月30日から9月1日に行われたJ-JIMAにおいて、漁業労働の現場を見学したことにより、われわれ8班が提案した改善案は、大きく分けて2つの側面からのアプローチを採用したものであった。1つは漁業労働者を空間的な側面から見た場合のアプローチである。これは漁業労働における空間的・環境的な側面について見る場合、とりわけ労働者のまわりの環境、たとえば手すりや足場、モーターなどの「モノ」中心的なアプローチである。一方、時間的なアプローチとは、漁業労働者の問題を労働時間内だけで見るのではなく、彼らの生活も含めて大きくとらえることを意味する。われわれの班では、とりわけ後者のアプローチに焦点を当てて改善案を提案するように試みた。

B. 空間的な側面からの改善案

安全性

空間的側面からの改善案としては、手すり

*中央大学, ** 千葉工業大学, *** 日本大学,

**** 高崎経済大学, ***** 神奈川大学

や足場の改善、ひいては「空間的」という言葉を拡大して「教育環境」の改善を提案する。手すりや足場の改善については、漁船の見学から、一番目に付きやすい改善すべきところであると思われた。またその改善案については他の班で多く述べられていたのでここでは言及しない。

教育環境についての改善については、見学時に漁業労働経験者から「近年、漁業労働者数の減少が生じている」というコメントから、漁業労働がどのような労働なのかということについて一般へ認識を高めることが、労働者の確保の糸口となるのではないかと考えた。また現在、漁業労働に就いている労働者の教育環境を整えることも、ミスやニアミスを防ぐ予防策となりえるのではないかと考えた。以上の改善案は、労働者の問題を安全性から見た場合の改善策であった。

C. 時間的な側面からの改善案

健康性・生活性

時間的な側面からの改善案では、2つの

問題点をあげて検討していく。ひとつは、実際に漁をする時刻帯が深夜なので、睡眠が不規則になることである。ふたつ目には、漁業労働が天候や魚のとれ具合によって左右されるので、休日が不規則になるということである。そこで、このような漁業労働者の問題を考えるにあたって、われわれは彼らの労働時間内だけに焦点を当てて改善策を検討するのではなく、もっと大きく生活を含めた問題のとらえ方が必要となるだろうと考えた。たとえば労働中のミスやアミスが疲労から生じるものであるとすると、それを回復へと導く「休息」「休憩」「休暇」という側面から改善案を検討することができよう。またここで述べている休みの取り方は、「休息 休憩 休暇」というように時間的に分けて考えることができるものを意味している。そこで本報で述べる「休息」「休憩」「休暇」を以下のように定義する。「休息」とは数分間においての、「休憩」とは数時間においての、「休暇」とは数日においての頭と身体を休めることとする。

このような文脈から、それぞれの改善案を提案していきたい。「休息」においては、雑談やたばこを吸う環境や制度の整備をすすめることで、ミスやアミス、ひいては何日間も同じ船上で暮らす船員たちの人間関係の円滑化をねらっている。これは船上での労働の多くが信頼関係の上になりたっているので、重要な対策であると考えられる。「休憩」においては、漁業労働の性質からして、実質的に働く時間帯が夜間に位置するために、疲労の回復過程としての睡眠を十分に確保す

る手だてが求められる。そこで船内での睡眠環境の整備、仮眠をとる制度の整備などが改善策として提案される。最後に「休日」を考慮した改善策としては、「アソカ-スリープ」といわれる睡眠の取り方を提案する。このアソカ-スリープとは通常睡眠をとる時間帯（たとえば0-8時）に、いつもとっている睡眠時間の半分（この場合は4時間）をとることで、それ以外の睡眠（4時間）は一日のうちのどの時刻帯にとっても生体リズム、とりわけ体温リズムを崩さないで過ごすことができるという睡眠の取り方である。この睡眠方法を応用することは、さまざまな効果が期待できる。たとえば覚醒水準の低下を防止することで安全性の向上、疲労回復に必要な徐波睡眠を確保することで健康性の向上、深夜時刻帯の漁業労働を終了した後に費やす昼間睡眠の時間を減らすことで生活性の向上という少なくとも3つの効果が期待できよう。そしてわれわれは、このような改善案をとることは、問題点の1つである睡眠の不規則性を緩和することができるのではないかと考えた。

そして、もうひとつの問題点としてあげた休日の不規則性については、漁業労働への認識もしくは教育制度の向上などを通して、漁業労働に従事する労働者を増やすことが必要だと考えられた。つまり、労働者が増えればそれだけひとりひとりの負担が軽減され、休日ひいては定休日の増加が期待される。しかしその反面で、一定の収入に対して労働者の数が増えるということは、労働者ひとりひとりの収入が減ることを意味する。しか

しながら完全失業率が 5%以上になった現在、できるかぎり失業者を受け入れていく体制は必要かと思われる。またそのような体制をつくっていくにあたって、緊急地域雇用特別交付金事業のような失業者を受け入れる体制を支援する公的な援助の拡充が期待される。

D.感想

久保: 今回の見学で、いままで考えたことのなかった漁業労働の問題についてふれることができ、とても勉強になった。またこのような見学の機会を下さった先生方に感謝したい。

茂木: J-JIMA に参加して、「日本の漁業」の実態に触れることができ、大変勉強になりました。特に「日本の漁業」は、経験に基づくものだとひとしと感じました。最後に、久宗先生、各大学の先生方、漁協の皆様そして8班のみんなありがとうございました。

南雲: 今回の見学では、今までふれた事のない漁業労働の問題についてふれ、他大学の皆さんと討論出来た事は、とても勉強になりました。またこのような見学の機会を下さった久宗先生、漁協の皆さん、ご指導いただいた先生方に感謝します。

竹内: 今回の J-JIMA で、普段接することのない「漁業」の現状に触れ、非常に多くの事を学ぶことが出来ました。漁業・漁村の歴史や文化についても、知らずにいる事のもったいなさをヒシと感じました。今回、お骨折りいただいた久宗先生、漁協の皆さん、ご指導いただいた諸先生方、参加された各大学の皆さん、ありがとうございました。

江口: 四方を海に囲まれた国に住みながら、漁業の現場に触れたことが無かった、というのは、考えてみると不自然かも知れませんね。世の中そんな不自然なことだらけですが、今回の JJIMA で、漁業の現場の「匂い」に触れて、現場ならではの

視点を共有できた気がしました。日頃から、現場ならではの視点というものに欠けるなと思う自分などにとっては、非常に有意義な勉強になったと思います。久宗先生を始め、見学させていただいたお話をしていただいた方々、そして8班の皆さん、ありがとうございました。

久後: 今回の合宿のように現場の人とのコミュニケーションをとりながらの研究作業はとても分かり易いし、行った作業の成果が理想ではなくて現実味を帯びると思うのでいいことだと思う。これからもうこういった合宿を続けていってほしいと思う。

小川: 今回の合宿では、漁業現場の改善案を通して、普段は聞けない、他大学の皆さんの意見が聞けて、とても勉強にもなり、刺激にもなった。今回は、良い経験になった。次の機会にはもっと、自分の意見を言えるようになりたい。最後に、波崎町の皆さん、先生方、お世話になりました。ありがとうございました。

太田: J-JIMA を通して、漁業の実態を知ることができてよかったと思う。また、多くの先生方、学生とお話ができる機会でもあり大変勉強になりました。今回の J-JIMA のために多大な努力をしていただいた久宗先生はじめ、多くの先生方、漁業組合の方に感謝したいと思います。